

第119回

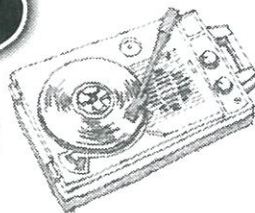
テレサ・テンが遺した 「歌う言葉」の美しさ

テレサ・テンが来日し、日本でレコードデビューを飾るのは昭和49年3月、彼女が21歳のときでした。母国・台湾ではすでに14歳時にデビュー、『涙の太陽』『真赤な太陽』『恋をするなら』など日本製エレキ歌謡をカバーしたり、日本の女性アイドルが歌うような歌謡ポップス調の歌をヒットさせていました。

それと同時に、古いタイプの流行歌を標準中国語（香港で話されている広東語ではなく、北京語に近い中国語）で歌っているのですが、これが実にすばらしい。歌詞の意味はわからなくても、チャイニーズ・メロディーに乗せて歌われる中国語の美しさを堪能できます。

日本では、筒美京平作曲のポップス調デビュー曲『今夜かしら明日かしら』が予想外に売れず、早くもシングル2曲目で『空港』『雪化粧』というムード歌謡路線に切り替えて成功したのは、当時そのジャンルを歌う若手女性歌手が少なかったこともあったでしょうが、日本語でテレ

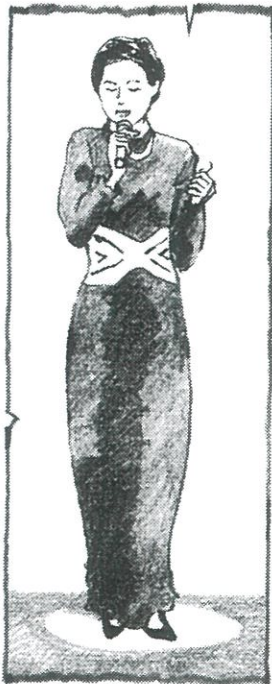
サが歌う「言葉の訴求力」とムード歌謡の魅力が結合したからでしょう。不祥事で国外退去を余儀なくされ、



名曲カルテ

昭和歌謡と いまでも

堀井六郎
絵・松本 浦



シングル盤発売がとだえてから2年8か月後の昭和58年10月、30歳での復帰作は、男性との3年ぶりの再会に胸をときめかす女心を歌った『ふたたびの』でした。小林幸子の持ち歌をカバーしたのですが、再デビューという本人の現実に重ね合わせようとした選曲でした。

大ヒットにはつながりませんでした。男性ファンを恋人に想定したドキュメント風歌謡は、その後の『つぐない』『愛人』『時の流れに身をまかせ』で女性の心まで捉え、1年1作ペースに乗って3曲とも大ヒット、有線放送系の2つの賞では3年連続してダブル・グランプリ受賞という偉業を成し遂げています。

テレサの繊細な声は押し付けがましさを感ぜさせず、かつて昭和の男性が理想としていた「待って、自ら身を引く女性」としての虚像を増幅していきました。『つぐない』と『愛人』がヒットしていた時期は、不倫

を題材にしたテレビドラマ、『金曜日の妻たちへ』シリーズが放映されていた時期でもありました。

「愛をつぐなえば」と歌われる『つぐない』の歌詞に対し、「愛は償うものではない」と疑問を感じても、テレサが歌うことで愛は不倫に置き換えられ、別れることで償いたい、という意思が伝わってきます。

日本における絶頂期を迎えたテレサは、その後『スキヤンダル』『別れの予感』などの意味深ソングで昭和を終えます。平成に改元された直後に『香港』をリリース、その3か月後に北京で天安門事件が勃発、翌年に中国本土で予定されていた念願のコンサートは夢と消え、パリに移住します。テレサ36歳、喘息の発作で亡くなる6年前のことでした。

テレサは先の見えない未来に対し、「時の流れ」に任せつつも永続する愛を願って歌い、その3年後、美空ひばりは自らの人生と時代の過ぎ行く様を「川の流れ」

に重ねて歌いました。過ぎた日に想いを馳せるカーペンターズの『イエスタデイ・ワンス・モア』のように。